

自立した主権者 をめざして

▶ ▶ ▶ Vol.29 私たちが望む未来の創り方

KEYPOINT

- あなたにとって二項対立とは？
- あなたが歴史を振り返る時とはどんなとき？

SUMMARY

様々な課題解決の方法が変わろうとしています。目の前の不利益よりも、将来の展望を重視した対応策をとるためには、多くの異なる意見を持つ人との対話が必要です。誰かが生きやすい社会は皆が生きやすい社会です。

「望ましい未来」像をつくるために、私たちがすべきことを考えてみましょう。

お知らせ

「がんばろう、日本！国民協議会」の機関紙 524号（1月1日発行）1面論文について、構成や流れや受け止め方等をコメントする場を YouTube チャンネルで配信しています。毎月配信しますのでニュースと併せてご視聴ください。



多数決では解決できない課題

何かの課題を解決しようとしたとき、私たちはどのような対応をするでしょうか。例えばコロナ禍においてどのタイミングで「マスクをはずすか」という課題があるとき、私たちが何を問題にするかということ、「マスクを外してもコロナ前の生活（感染しない生活）に戻るわけではない」ということです。新型コロナがインフルエンザと同様に感染症法上の5類に位置付けられたからと言って症状が軽くなるわけでもないのに、マスクを外しても良いと言われる。実際心の中ではマスクを外したいと思っている自分もいて、そのことを望んでいるのだけれど、はずしたために誰かにうつってしまったらどうしようという不安も残る。家族間や職場などで多数決をとってみたいところで、何かあった時の責任をだれがとってくれるのかわからないうちは結局結論が出せないのではないのでしょうか。これは、問題の解決を「はずす」「はずさない」の二項対立で考えているためにおこることです。目の前の制約（問題）を取り除くことで問題を解決しようとしたら、不便を解決して便利なモノ・コトを提供しようとする、フォ

アキャスト思考といわれています。この方法では、マスクの問題は解決されない。なぜならば、マスクをはずした後の社会の運営基準が「コロナ以前」のままであるからです。

もう一つ、最初に望ましい未来像についてイメージを描き、次にその未来像を実際に実現するためにはどんな施策が必要かを、未来から逆算して考えていく、バックキャスト思考という考え方があります。これは、将来の制約（問題）を受け入れて、新たなライフスタイルに変容を促すことで問題を解決する思考です。この方法で考えると、まず必要なのは自分がどんな未来を望むかということになります。コロナ禍で自分はどのような生活を送りたいのか、感染への不安は人によって違いますから、その未来に対してとる行動は自ずと変わってきます。そこには二項対立はありません。白か黒かではない対処法が生まれるのではないのでしょうか。

私から私たちへ 望む未来社会像の共有

しかし、こうした考え方をするためには、問題定義のところで二項対立が発生することが重要になります。二項対立の溝が深いほど、解決策における価値観の変化や行動変容が求められるため、より深い議論や分析が行われることになると考えられます。

また、「望ましい未来」を考えるためにも二項対立の概念は必要です。例えばマニフェストを作成する際、ある課題に対して自分自身は「A」だと思ふけれど、「not A」、もしくは「B」の人もいる

ことは想像がつかず、自分がなぜ A を選ぶのかの説明はできると思いますが、not A や、B の人はなぜそう考えるのかを聞き、対話することで「望ましい未来」像の共通点が見えてきます。「望ましい未来」を定義するための対話には、異なる意見が必要なのです。それは多数決で決めるための選択肢ではなく、問題を解決するための制約となります。制約を受け入れたうえで考える未来は「私の望む未来」であると同時に、「私たちの望む未来」となり、その未来を創るためのマニフェストも、個人のマニフェストから、地域のマニフェストになっていくでしょう。



多層的、多角的な社会での民主主義の在り方

今世界で起きている問題も同様です。ロシア・ウクライナの戦争は、正義か悪か、加害か被害か、で解決できるものではありません。戦争が終結することは当然の願いですが、終戦後にどのような未来を望むのかについては、対話が必要です。国やその国の人々が追求する価値が複数になっているため、そのそれぞれをスタート地点にするとそこからまた

対話が必要となってきます。こうしてできた多層的、多角的な構造の中でさらに対話を続けていく。気が遠くなるような作業ですが、答えのない問題を解決していくには、多数決＝民主主義といった単純思考ではなく、討論、寛容、譲歩を繰り返しながら合意形成に進む、民主主義のプロセスを重視がなにより必要なのです。

社会課題の解決方法を二項対立にしないためには、平和とは何か、また人権とは何かについての対話が重要です。平和において、恐怖や不安や自信のなさが「相手を叩き潰さなければ」という発想につながります。私たちはいつだって自分に自信がありません。自分がマイノリティにならないようにしていることが一番安全で平和で、みんなと一緒にいることが安心。しかし二項対立の世界では必ず排除されるものが生まれます。それが私たちの望む未来でしょうか。

私たちの望む未来を創るために今私たちができることは何か。何が制約なのかも含め、私もあなたも対話を続けていきましょう。

〈機関紙「日本再生」No.524の内容〉

2023/1/01 発行

歴史的転換期に考える「戦争と平和」と民主主義 ● 3-5 面 / コラム / 一灯照隅 ● 6-7 面 / 寄稿「危機のミャンマー」/ チョウチョウソー・在日ミャンマー市民協会理事 ● 8-11 面 / インタビュー / 沖縄県知事 / 野添文彬・沖縄国際大学准教授 ● 12-18 面 / 囲む会 / 私たちの地方自治 / 岡田知弘・京都橋大学教授 ● 18-23 面 / 講演 / 「水の都」に学ぶまちづくり / 川勝健志・京都府立大学教授

※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に
考えてほしいこと

・二項対立と聞いてあなたが思い浮かべることは何ですか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。